

生徒と情報の今昔物語（後編）

杉並学院高等学校教諭
志賀 潔

前編では、むかしの生徒や情報教育について、本校での情報教育を通じて感じてきたことを述べた。後編では、いまの生徒や情報教育、そして今後のことについて、述べていきたい。

5. いまの生徒とこれからの生徒の情報

いまの生徒が、最もよく利用し、最も身近に感じている情報機器はなんだろうか。論ずるまでもなく携帯電話である。コンピュータではないのである。彼らは、常に携帯電話を持ち歩き、携帯電話を利用して生活している。

携帯電話の本来の機能は電話であり、受話器の向こう側にいる相手とリアルタイムで話をするための道具である。しかし、いまの携帯電話はインターネットの仕組みで情報を得たりメールを受発信するための道具の機能の方に重きがおかれているといえる。生徒たちは、電話としてよりもメールの受発信装置としての携帯電話を、大変上手に使いこなしている。なぜコンピュータでなく、携帯電話でメールをするのか複数の生徒に尋ねてみたことがあるが、異口同音に起動やメールの受発信の手軽さをあげるのである。

携帯電話は、生徒たちにとって、仲間どうしの1つのコミュニケーションツールである。全体の中の自分の位置を気にするいまの生徒の世代では、携帯電話によるメールのやり取りは、友だちとのつながりを確認する重要なものなのであるらしい。彼らは携帯電話のメールに対して、できれ

ば電話で話しているときのように、すぐに返信が欲しいという気持ちを強く持っているが、相手が忙しいようであれば返信は後でもよいという第2希望的な気持ちを持って携帯電話のメールを利用しているのかもしれない。そういった意味では、携帯電話のメールは、彼らにとって準リアルタイム的な応答を持ったコミュニケーションツールといったところなのかもしれない。

いつも私の授業で眠そうにしている女生徒に、なぜ眠いのか尋ねてみたことがある。その生徒は、携帯電話のメールがいつ来るかわからないので、朝の4時ぐらいまでうかつに眠ることができないと言っていた。この生徒の場合は極端な例かもしれないが、友だちとの関係を何よりも大切にする現代っ子たちの風潮を端的に表しているといえる。この文章をお読みになっている先生方も、電車から降りたとたんに携帯電話を取り出し、メールをチェックする若者を何人も見かけたことがあるであろう。また、若者たちが、仲間どうしで楽しく会話しているときであっても、誰かの携帯電話が鳴ると、みんな話をやめていっせいに携帯電話を取り出して画面を開き、着信の有無を確認する様を見かけたことがある人も多いと思う。

先日、私が自動車を運転しているときに、前からふらふらと走る自転車 came。良く見ると、なにやら携帯電話を親指で操作している。メールを打っているのかもしれない。私はかなり手前で停車したが、携帯電話で忙しいその人は、私の自動車の前を斜めに横切ってそのまま後ろに走り去っていった。生徒たちの世代の若者にとって携帯電話のメールは、何ものにも勝る大切な道具なのである。あるいは、心の不安を補う道具なのかもしれない。

携帯電話を上手に利用するのは良いのだが、携帯電話に振り回されるような状況は、是正しなければならない。情報機器は使うものであって、それに縛られて自分の学習時間や普通の生活、はた



また健康や命までを犠牲にするものではないのである。情報機器は、その機能を上手に使いこなすのは良いのだが、使うT.P.O.も考えて上手に使わなければならない。

携帯電話の話が長くなったが、現代の情報社会では、パソコンや携帯電話だけが情報社会の機器ではない。デジタルカメラ、デジタル放送、Suica、果てはインターネットで加熱の手順を確認して料理するレンジ、外出先からON・OFFできる家電製品など、情報社会におけるデジタル化の波はとどまることを知らない。携帯電話と同様、生徒たち若い世代は、私たち教師のような大人の世代よりも、機能的な面については素直にそれらを受け入れ、その仕組みを上手に利用している。子供の頃からデジタル製品に囲まれている生徒たちは、操作方法の理解には、そんなに時間がかからないのである。

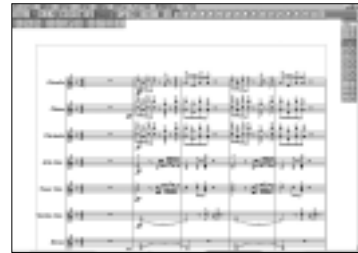
携帯電話のメールによるコミュニケーションは、特定の人たちとのコミュニケーションである。しかし、生徒たちは限られた閉じた範囲の中でのコミュニケーションで終わっているかというところ、そうともいえず、自分のblogを持っている生徒が最近では数多くいる。blogに書き込む内容は、たとえば、「メガネが壊れた」とか、「昨日友だちと食べたラーメンがおいしかった」といったような、日常で起きたごく普通の出来事を日記のように書き込んでいる生徒が多いようである。携帯電話のカメラ機能で写真を1枚パチリ、そして親指で携帯電話のキーをカチカチ、デジタル絵日記の出来上がりである。

6. いまとこれからの情報教育

私の勤務する高校では、高校1年で情報Aを全員必修としている。高校3年では、情報Aの続きとして、情報B・C、プログラミング講座、CG・DTM(Desktop Music)講座を自由選択で置いている。情報が一般化されつつあり、情報社会が一般社会とニアリーイコールになりつつある現代、そして未来では、全員が学ぶ必修の情報科目において、技術的、知識的に出来るだけ広く学ばせたいものである。本校の情報Aでは、検定教科書は当然持たせているが、過去の指導の経験を踏まえたオリジナルのテキストも持たせ、それをも

とに授業を展開している。広く情報を学ばせるために、一般的にはあまり行われないMIDIの打ち込み、アニメーションの作成の実習も、簡単なものではあるが課している。

このような情報の各分野を経験した結果、より深いものに触れてみたいと思う生徒のためには、自由選択としてCG・DTM講座を設置している。この科目では、より高度なMIDIの打ち込みやサンプリング、3D・CGなどを指導している。



DTMの譜例

同じく選択科目のプログラミング講座では、本校の情報Aの3学期に実施するホームページ作成の授業の続きとして、はじめはHTMLの延長でJavaScriptを学び、その後Visual Basicに移り、最後にC言語を学ぶのが最近の授業展開の内容である。それぞれの言語は、それほど深いところまではやらずに、経験するだけといったレベルで終わってしまうが、プログラミングとはどんなことをやるものなのか、コンピュータにはどんなことが出来るのかなどについて認識し、理解してもらえればと思って授業に臨んでいる。



生徒の作品(時計付電卓)

そして情報B・Cは、検定教科書で授業を展開している。コンピュータの構造やモデル化、データベース、情報社会学的内容などを学習させ、より深い問題解決の考察や、あふれる情報の取捨選択能力を身につけてもらえばという思いを込めて指導している。

本校の情報関連科目のラインアップは、当面はこれらでよいと思っているが、変化のめまぐるし

い情報を扱っている科目群なので、必要に応じて適宜、内容、さらには科目そのものの見直しを行なわなければならないと考えている。情報関連科目は、まさに生ものである。これを読んで下さっている情報担当の先生方の、事前研究と実践のご苦勞も大変なものと推測する次第である。

情報教育の実践とその精神の浸透は、授業内だけとは限らない。本校の場合は、ホームページに電子掲示板とチャット、メールの仕組みとしてメーリングリストと自動応答メールを実践中である。



杉並学院・電子掲示板

電子掲示板は、学校あるいは生徒に不利益な書き込みや根も葉もない噂、無意味な文字の入力を行なわれる可能性を常にはらんでいる。チャットも同様である。この2つの仕組みは、ほとんどの学校では開設していないのではないだろうか。

たしかにこの2つのものは、管理が大変難しく、いわゆる荒れる状態になる場合が結構ある。しかしきちんと管理していれば、大きく荒れることはあまりなく、電子掲示板を荒らした人は逆に、本校生徒たちのきわめてまともな反論を受けることになる場合も多い。私の個人的な考えだが、電子掲示板やチャットが、きちんと管理・運営できるのであれば、情報教育における倫理教育を実践できる貴重なものと思っている。残念ながら校内では、このコンセンサスが全会一致的に得られてはいないのが現実であるが、本校の情報倫理教育の



放課後のパソコンラウンジ(パソコン室)

一端を担っているといつてよい。少々危険を伴うので、一般にお勧めできるものではないかもしれない。生徒たちには、悪意のある書き込みはしないという心のカギを持って欲しいと願っている。

もう1つの情報教育における授業外の実践項目群として実施しているのが、メーリングリストと自動応答メールである。これらは、学校でインフォメーション用として1組のリストとアドレスを持っているが、クラスや部活動などにも広く仕組みを開放し、校内のいくつかのグループでも活用されている。利用の多くは主として部活動である。これらを実際に生徒や担任、部顧問が運用することで、情報伝達の確実性や即応性などの便利さを実感すると共に、もし誤った情報を流したときにどんなことが起きるかということ、身を持って経験している。はじめのうち、軽い混乱が起きることがあるが、軌道にのればたいへん利用価値の高い便利なものである。



杉並学院・携帯インフォメーションHP

私の場合は、自分が担当している部活動の連絡用に使用しており、主として部長や副部長が管理している。活動日時や場所の変更や持ってくるものの確認などに大変便利である。校外での行事の実施時の確認にも利用される。まだ実際にはないが、災害時の情報伝達には、かなり役立つと推測している。このメーリングリストを実践して、携帯電話の普及率の高さを改めて実感した。登録されているメールアドレスの実に98%が携帯電話のものである。

電子メールを利用した、学校教育の現場における利用価値の高い仕組みは、他にいくつか立案中のももあるが、まだ実践できていないので、ここで書き記すのは控えることにする。

携帯電話の高い普及率と、持っている人がほとんど常に持ち歩いていること、そしてそれがインターネットに接続でき、電子メールをやり取りで

きることを考えると、これを利用しない手はないような気がする。しかしまだ、携帯電話の学校への持込みを禁止している学校も多いと思う。本校でも2年程前までそうであったが、原則として校内での使用禁止や、学校近隣での携帯電話の使用をできるだけ控えることを原則的ルールとして、持込みを許可したところ、大半の生徒はこのルールを素直に受け入れ、そのとおりに守っている。

例外として本校の場合、文化祭の開催期間中は生徒どうしの連絡の必要性が高いと考え、いくつかの場所を除いて校内での使用を許可している。生徒たちは、携帯電話をトランシーバのように使い、準備や追加材料の調達などに利用している。使用のマナーは実に良好である。

最後に、厳密には情報教育の範疇から外れるかもしれないが、身分証明書を磁気カード化し、遅刻した生徒のカードをカードリーダーに必ず通させ、遅刻指導の管理をデジタル化したところ、遅刻者が激減したので書き添えておきたいと思う。本校は生徒が1300人ほど在籍しているが、遅刻のデジタル管理を実施する前は、日々の遅刻者が数十人単位で発生していた。しかし、遅刻管理のデジタル化の実施後は、日々の遅刻者は10人前後になった。その10人の中には、通院などによる遅刻者も含まれているので、正当な理由のない実遅刻者は、ほんの数人ということになる。日々の遅刻者は1%にも満たない。どんな心理的要因が功を奏したかはわからないが、磁気カードによる遅刻管理に対して、生徒が暗黙のプレッシャーを感じていることは間違いない。



磁気カードとリーダー

遅刻管理以外にも、図書室の利用や保健室のカルテの呼出し、事務室での証明書発行など、生徒を唯一無二に特定する必要性のある処理は多い。いろいろな可能性を模索したいと思っている。磁気カードには、半角で60数桁分の文字情報を磁気で記録している。本校ではそこに発行年度、学籍番号、発行回数等を記録している。磁気は保管の環境によってまれに壊れてしまうこともあるので、本校のカードの表面には磁気情報と同じ情報がバーコードでも記録されている。磁気カードリーダーとバーコードリーダーのどちらでも同じ情報を得ることができるようになっている。

7. さいごに

いまの生徒は、情報機器の基礎知識や基本的操作を既に身につけている。たくさんの方の発展の可能性を秘めている生徒たちの情報のスキルを、どのように引き出すのか、どんな指導が最善なのか、私たち高等学校の教師に課せられた大きな課題である。

情報という分野は、いままさに発展途上の最もホットな分野であるといえる。情報は、技術的な面もそれを利用する形態や倫理的側面も、どんどん変化していつてしまう状態であるがために、情報社会の形態は次々に変わってしまう不安定な分野だとも言える。

情報を担当されている先生方は、もし100人いれば100通りのご苦労が、1000人いれば1000通りのご苦労があると思う。情報教育をどのように推進していけばよいか、教育現場における情報処理の良い実践例、さらには未来の情報教育へのアイデアを、教育現場に携わるみんなで共有し、みんなで工夫し、みんなで推進できればよいと思う。情報教育に携わる先生方が日本に何人いらっしゃるかにはよくわからないが、1人の天才の情報指導者よりも100人のやる気のある情報指導者、1000人のやる気のある情報指導者の方々の力の方が勝っているであろう。アイデアを、教材を、実践方法をみんなで共有できれば、それが日本の情報教育の充実とさらなる発展につながると信じている。新しい教科である情報をよりよいものに築き上げていくのは、私たち情報教育に携わるものの楽しい義務である。